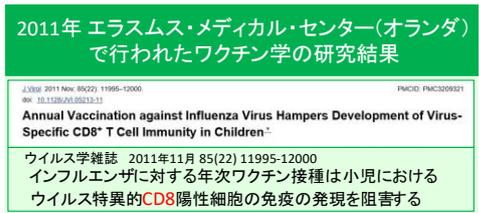




であり、また「自然感染で作られる抗体」であることをもっと理解してほしいものである（個人的見解）。

## 子どもにワクチン接種を繰り返すと免疫システムが悪化する

2009年のインフルエンザ A (A/H1N1:新型の豚インフルエンザ) による似非パンデミック騒動の時は、“ワクチンの接種を受けた人々、特に若い人・小児の間で感染が拡大し重症化していた”とお伝えした。海外では医療関係者による『ワクチン接種反対運動』が展開され、政府により『接種禁止措置』が取られた国もあったが、日本ではワクチン接種が続けられていた。この09似非パンデミックの2年後、2011年11月、皮肉にもワクチン推進派に属するオランダの科学者によって“毎年、毎年予防接種することで、逆に免疫力が阻害され、より重症化する”という可能性が実証され、ウイルス学会誌に発表された（詳細はNo.058 2017年3月）。このオランダのエラスムス・メディカル・センターが発表した研究の結論は『子どもに定期的にインフルエンザワクチンを接種すると、子どものインフルエンザと闘う免疫システムが悪化する』というものであった。毎年インフルエンザワクチンを接種することで、ウイルス特異的 CD8<sup>+</sup> T 細胞反応の形成が妨害され、細胞性免疫が阻害される可能性があるという結果であった。ワクチンを毎年接種した子どもでは、年齢と共に上昇するはずの CD8<sup>+</sup> リンパ球の活性が低く、また、インフルエンザウイルス以外の全てのウイルス感染に対するリンパ球全体の活性も、ワクチン接種児では低下傾向を示していた。09 似非パンデミックの時、小児での発症が多かったことも、季節性インフルエンザワクチンを打った子どもの方に重症化が多く認められたことも、この論文の仮説で説明が可能であった。本来、ヒトの免疫は自然感染により培われるのだが、現代の子ども達の免疫はワクチンのみで誘導される場合が多く、ワクチンを子どもに接種した場合、交差免疫が抑制されてしまうということであった。「ワクチン非接種の子ども達の方が免疫反応がより強い」「非接種の子ども達の方がインフルエンザから身を守る機能がより強い」と考えられた。この研究のリーダー Rogier Bodewes 氏は「インフルエンザワクチンには潜在的な欠陥があり、これまで正当に検討されてこなかった。これについては公の場できちんと議論されるべきである」との趣旨を述べていた。しかし、公の場できちんと議論されることなく、現在のコロナ禍に至っているのである。



現在のインフルエンザ・ワクチンには (参考)ウイルス学雑誌2011年11月 85(22) 潜在的な欠陥がある		
	定期的ワクチン接種児	ワクチン未接種児
液性免疫系	特異的CD4 <sup>+</sup> T細胞反応 (+) ⇒ helper T 細胞 ⇒ B 細胞 ⇒ 抗体 ↑	特異的CD4 <sup>+</sup> T細胞反応 (+) ⇒ helper T 細胞 ⇒ B 細胞 ⇒ 抗体 ↑
細胞性免疫系	特異的CD8 <sup>+</sup> T細胞反応 ↓ 細胞障害性T細胞 (CTL) ↓ 非特異的リンパ球活性 ↓	特異的CD8 <sup>+</sup> T細胞反応 ↑ 細胞障害性T細胞 (CTL) ↑ 非特異的リンパ球活性 ↑
	細胞性免疫の阻害 免疫システムの悪化 X	細胞性免疫の強化 免疫システムの強化 O

ワクチン未接種児の方が、今後世界的流行が懸念されるインフルエンザに対しても、『身を守る機能がより強い』ことが判明した。(Rogier Bodewes氏)

「毎年、毎年予防接種することで、逆に免疫力が阻害され、より重症化する」という可能性が実証され、ウイルス学会誌に発表された（詳細はNo.058 2017年3月）。このオランダのエラスムス・メディカル・センターが発表した研究の結論は『子どもに定期的にインフルエンザワクチンを接種すると、子どものインフルエンザと闘う免疫システムが悪化する』というものであった。毎年インフルエンザワクチンを接種することで、ウイルス特異的 CD8<sup>+</sup> T 細胞反応の形成が妨害され、細胞性免疫が阻害される可能性があるという結果であった。ワクチンを毎年接種した子どもでは、年齢と共に上昇するはずの CD8<sup>+</sup> リンパ球の活性が低く、また、インフルエンザウイルス以外の全てのウイルス感染に対するリンパ球全体の活性も、ワクチン接種児では低下傾向を示していた。09 似非パンデミックの時、小児での発症が多かったことも、季節性インフルエンザワクチンを打った子どもの方に重症化が多く認められたことも、この論文の仮説で説明が可能であった。本来、ヒトの免疫は自然感染により培われるのだが、現代の子ども達の免疫はワクチンのみで誘導される場合が多く、ワクチンを子どもに接種した場合、交差免疫が抑制されてしまうということであった。「ワクチン非接種の子ども達の方が免疫反応がより強い」「非接種の子ども達の方がインフルエンザから身を守る機能がより強い」と考えられた。この研究のリーダー Rogier Bodewes 氏は「インフルエンザワクチンには潜在的な欠陥があり、これまで正当に検討されてこなかった。これについては公の場できちんと議論されるべきである」との趣旨を述べていた。しかし、公の場できちんと議論されることなく、現在のコロナ禍に至っているのである。

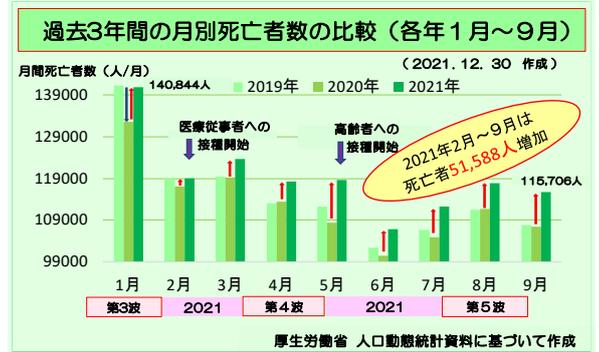
「ワクチン非接種の子ども達の方が免疫反応がより強い」「非接種の子ども達の方がインフルエンザから身を守る機能がより強い」と考えられた。この研究のリーダー Rogier Bodewes 氏は「インフルエンザワクチンには潜在的な欠陥があり、これまで正当に検討されてこなかった。これについては公の場できちんと議論されるべきである」との趣旨を述べていた。しかし、公の場できちんと議論されることなく、現在のコロナ禍に至っているのである。

## ワクチン副反応死は約4万人？（2021年2月～9月）

09 パンデミックの時にも131人の接種後死亡事例が報告されていたが、新型コロナでは、3/18の時点で1,512人と報告されていた（右表）。ここで、過去3年間の日本人死者数の推移に目を向けてみると、2020年死者数の2019年からの減少率は過去最高で、特に1月の減少率は大きかった（右下図青矢印）。インフルエンザが流行しなかったためと考えられているが、2021年には元に戻ってしまっていた（赤矢印）。

ワクチン接種後死亡事例報告数比較	
09 (新型インフル) パンデミック	新型コロナ パンデミック
131人	1,512人
世界各国でワクチン接種中止	コロナ防疫 1,430人 (3日目後28人) スライクハウス閉鎖 82人 (3日目後16人)
2010年3月2日 (新聞報道)	2022年3月18日 (2月20日報道)
新型インフルエンザ感染死亡者数 195人 (11ヶ月)	新型コロナ感染死亡者数 2,691.1人 (2ヶ月)

さて、ワクチン接種が開始された昨年2月から第5波が収束してきた9月末までの8ヶ月間についてみると、2020年より51,588人も増加している。この8ヶ月間のコロナ死亡は11,821人と報告されているので、51,588-11,821=39,767人の死亡は、新型コロナ非関連ということになる。春先から秋口までの温暖な時期に何故、「脳心臓血管疾患」の死亡が増えていたのか！この8ヶ月間のワクチン接種後死亡事例報告は1,255人（10/3集計）であるが、ワクチン接種慎重派の視点からみると、この約4万人の死者は「ワクチン接種後死亡＝副反応死」の可能性があると考えられる。



この約4万人の死者は「ワクチン接種後死亡＝副反応死」の可能性があると考えられる。

おわりに 今回のmRNA ワクチンは、麻疹・耳下腺炎・風疹のような弱毒化・全粒子ワクチンとは決定的に違う。また、不活化・コンポーネントワクチンであるインフルエンザワクチンとも違い、遥かに危険な遺伝子組み換えワクチンである。これは「デマ」でも「陰謀論」でもなく、「事実論」「真実論」である。今回の新型コロナウィルスは、狂犬病やエボラ出血熱、マールブルグ病のような致死性ウイルスではない。今回の遺伝子ワクチンの接種は「自然感染するよりはるかに危険」であることが分かってきた。「5歳から11歳」の子ども達へのワクチン接種は、是非、是非、控えていただきたい、と思っている（個人的見解）。